The Shaping Process of Kojin Shimomura's Thought (2)

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2023-04-14
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: Fukagawa, Akiko
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00005267

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

下村湖人の思想形成(二)

深川明子

(一)　湖人と短歌（その一）

下村湖人は青年時代、内田夕闇の筆名で文学者としての道を歩みつつあった。その内田夕闇時代はさらに、第五高等学校時代までの習作期と、東京帝国大学文科大学時代の文芸評論家期とに二分することが出来る。その後は、英語教師として赴任したのを契機に、佐賀県において教職生活に入ることになる。ここでは、湖人と短歌の出合い、内田夕闇時代の短歌の意義に軽く触れ、文学との訣別を余儀なくされた佐賀教師時代（大正初期）について、特に短歌との関係に焦点を合わせてみたい。

1

下村湖人と文学との出合いは中学時代に始まる。彼の中学入学は明治三十一年である。当時の文壇にまず目を向けてみよう。

すでに明治二十年代の初め、坪内逍遙は近代小説論を書き、二葉亭四迷はそれを実作している。また、文語体ではあったが、森鷗外の『舞姫』は、青年の自我という新しい問題を新しい角度から追求した作品であった。しかし、本格的な近代文学の創造は、三十年代詩歌を中心にして興ったとみるべきであろう。藤村の『若菜集』子規の『歌よみに与ふる書』鉄幹らの『明星』創刊と晶子の『みだれ髪』などを挙げることが出来る。『文学界』は明治二十六年に創刊されてはいたが、中心メンバーである透谷の自殺に象徴されるように、二十年代ではまだ文壇の文学革新の機運は熟していなかった。

湖人が中央の文壇の影響を受けるのは、明治二十年代後半に創刊され、地方の投稿家を対象とした『文庫』『新声』などの雑誌によってである。湖人の中学時代後半にあたる明治三十年代中頃は、人間解放の思想が、たとえば『明星』などを中心にして、中央文壇でかなり風靡していたが、地方にその思想が浸透するには今一歩の感があった。つまり、湖人との出合いとなった文学は、新しい思想による新しい文学ではあったが、それが封建的なものとの衝突の中で苦悩し、挫折しながらも一歩一歩前進していく力を持つまでには達していない時期の文学であった。新しい思想を理論としては理解できても、生活とのかかわりの中で体得するまでに根を下ろしてはいなかった。

この三十年代の地方の様子は、二十年代の中央文壇の現象と似ている。『舞姫』の主人公豊太郎が、自我の覚醒が人間のあるべき姿であると頭の中では理解しながら、結局現実の生活の中では体制に依存する道を選んだことや、坪内逍遙が小説を捨てて戯曲に逃避し、以前の文学理論の斬新さを失なったことなどは、二十年代の文学の一つの限界であった。同じことが三十年代は地方において言うことが出来る。結局、新しい文学の思想も、当時の地方の青年たちには観念的にしか吸収され得なかったのである。

以上のことは、湖人の文学観を探る時、重要な要因であると考えられる。つまり、湖人の観念的な詩や文学論は、彼の性格・環

境に充分影響を受けていることや、持定の文学者からの影響については前稿で触れたが、更に、今述べた彼の最初の出合いとなった文学の持っていた性格の影響も看過することは出来ない。

2

短歌と湖人の関係を、俳句・詩などとの比較によって考えてみる。

佐賀中学校の校友会誌『栄城』に湖人は可なり多数の作品を発表したらしいが、現在は散佚して見ることが出来ない。現存する最初の作品は、明治三十四年二月号の『新声』に載った短歌一首と俳句二句である。湖人、中学三年生の時であった。最初は短歌と俳句の二本立てで投稿したが、俳句はわずか『新声』誌上の七句と『文庫』誌上の二句に過ぎない。作品の出来栄えも、たとえば河東碧梧桐選の『新声』では全部乙部入選であり、単なる初心者の習作にすぎず、約一年余りで投稿を罷めている。客観的な俳句の世界は、湖人の体質に合わなかったようだし、俳句の体質を理解するには幼なかった。俳句は湖人にほとんど問題らしいものを投げかけることなく、彼の中から消えてしまった。

湖人は、短歌と俳句から文学へ接近していったが、間もなく詩の創作に専念するようになった。これには、同級生で蒲原有明の門下生であった平方暁声の影響が多分にあった。(暁声の詩は明治三十七年五・六月号の『明星』に見える) 湖人は主に『新声』へ投稿し、明治三十五年一月号には、目次に詩「海べの朝」が尾上柴舟と並べて扱われている。なお、明治三十六年九月、態本第五高等学校に入学したが、入学後間もなく『帝国文学』に詩「ちかひの虹」を投稿した。それが十一月号に掲載されたので、彼は一躍五高生の注目の的となった。彼の詩は観念的ではあるが、中学校・高等学校の学生としては卓越した見識を持ち、彼の特質を充分に表わしている。

湖人の文学活動の契機が短歌の投稿からであったことは、当時として当然なことであった。そして、この時代作歌活動は間断なく続き、佳作を残している。しかし、次第に詩や論説に惹かれ、それに主力が注がれるようになったことは、彼の本領が思索にあったことを意味するものであろう。

大学時代の文学的活動は、前半の詩歌時代と、『帝国文学』の編集委員として活躍した後半の評論時代に大別される。

前半の詩歌時代の詩には、今まで見られた気魄の籠った長詩が姿を消し、代って軽い歌謡風な小詩が見られる。それに対して、習作時代は詩に圧倒され勝ちであった短歌が多く発表され、充実した良い作品が見られる。高校時代までの気負った姿勢がなくなり、内面生活の成長・充実が反映していると言えようか。この期の短歌を内田夕闇時代の短歌の完成と見ることが出来る。

湖人の生活において、短歌が彼の文学活動の前面に押し出される時の出され方に二通りある。一つは精神状態がこのように安定した時期であり、他の一つは、その反対の苦悩と葛藤の時である。この時代は短歌が湖人の満ち足りた生活の象徴となった第一期である。

3

大学卒業後、やりたかった文学活動を家庭の事情で断念し、不本意ながら郷里に留ることになった。しかし、それは苦悶の毎日であったらしい。湖人は、教師生活一年後、内田夕闇名儀最後の短歌「火をすゝる」「日はのぼる」を、大正二年一・二月号の『帝国文学』に発表した。それを見ると、一日一日何とかせねばと思いながら結局何も出来ず、酒に浸り、酒に明け暮れする毎日の苦悩が、自嘲的に詠まれている。そして、そこには彼の文学論と対立していた自然主義の影響を、はっきりと見い出すことが出来る。

酒にあきぬ、あゝもとむべき何ものも我がまへになし。風白う

吹く。（火をすゝる）
われをわが忘るゝまなし。町ゆけばがらす戸ごとにわが姿見ゆ。（日はのぼる）

この時、湖人の肩には、実家の内田家と養家の下村家――どちらも既に没落していた――両家の重荷をどっしりと背負わされていたのであった。

湖人が文学の道を断念したのは、この環境のためであったのだが、もし、事情が違っていたとしても、文学者としての道は多難であっただろう。文壇では『破戒』や『蒲団』の作品の発表と共に、『早稲田文学』『文章世界』『読売新聞』『太陽』などで自然主義文学論が活発に展開され、明治末期には『何処へ』『田舎教師』『黴』など自然主義文学の代表作が次ぎ次ぎに生まれた。この自然主義文学全盛時代に、文学論では対立していた湖人はどれだけのことができたであろうか。現在文学史の上で、この時期の『帝国文学』派がほとんど問題にされていない。湖人は大学時代『帝国文学』の主力メンバーの一人であったが、そこで述べられた文学理論には、自然主義文学や大正初期の白樺派の文学理論に比較して、総合的に古さや観念性が指摘出来る。そして、これは、少年時代彼の出合いとなった文学の質と、葉隠の伝統で培われた県民性、武士の血を引く家柄、彼の成育歴などから当然の帰結であった。

前稿で「内田夕闇」の終焉、つまり、文学の世界からの一応の訣別は、「下村湖人」としての出発のためには必要条件であったと書いたが、これはその理由の一端である。

4

大正五年、湖人は気持を取り直して新春を迎えた。昨年生まれた長女晴代は、はや満一歳の誕生を迎えようとしていた。文学への未練はなお断ち切れないものがあったが、そして家庭の雑事も相変らず彼の肩にかかっていたが、それなりの落ち着きを見せつつあった。湖人は日記代りに短歌を詠もうと決めた。彼の生活の中で、彼の心情を、生活を、容易に表現出来るものは、やはり短歌であった。湖人は、文学だ、創作だと気負わずに彼の心情や生活を歌に詠んでみようと思ったのだ。彼の自己表現への欲求が素直な形で生活の中から出て来たのだった。

昨年、東京新宿の百人町にある下村家を訪問した折、偶然、新資料である大正五年の手帖を見つけることが出来た。細かい字で丹念に書かれた手帖は、湖人がかなり大切にしていた物らしく、少しの破損もなく保管されていた。

この手帳には、一日一日から三月二日まで、毎日幾首かの短歌が書いてある。三月一日の高田保馬宛書簡には「……これは元旦以来の歌からぬき書したのです。昔の様に空想を走(ママ)することなく、日々の経験をしんみりと歌って見たいと思って日記にその日その日書きつけて居ます。しかし久しくやめて居たので言葉がどうも思ふ様に出て来ません。……」とある。

手帳から主な出来事を抜き出してみよう。

一月十九日・二十日　同盟休校（十二首より）
正義てふものにとらはれ暴力にかひな折られし子のあはれなる
師弟てふいつはりのみの生活をのがれ出でんとひしめく子らよ
暴力にこびて師などをあげつらふ子らを教へて世に生くる人
山ごもる二百の子らにさびしさの今かわくらし夜の木ならべり
燭の火をそびらにうけて狂暴の子の立てるをばうかゞへる子ら
先祖をばゆめ忘るなと母の来て言へるが悲し子の顔も見で

大局的な立場から努めて客観的に詠もうとした中にも、湖人の生徒に対する無垢な教育愛が窺われる。

二月八日　小人劇観覧の印象を詠んだ八首がある。これは後に歌集『冬青葉』に収められた。

二月二十日　「祖父母、母の墓をほる。我子やむ」
母の骨ほるとてまだき野をゆくに星あかりして冬木うごかず

骨ほる日風吹きあれて墓あなにうなれば心うちふるふかな
穴底の櫂をふまへて墓ほりの酒を呼ばふず恐ろしきかな
この骨に我がいだかれていねしことあると思へば身も世もあられず
白骨に日の目見せたる我がしぐさ子にむくい来て子は熱をやむ
永雨さへいたくふり来ぬ母の骨ほりてわがめに見入るゝ宵闇
燭とればかめの中なる母の骨茶色に光り風はたとやむ
されかうべ五つならびて新墓のかめにおさまりくゝと音する

『冬青葉』に「母の骨」と題した絶唱二十五首の原型である。場に臨んで詠んだなまなましい感動がある。『冬青葉』は母への思慕に主題を統一し、感情を沈潜させて深い味わいを出している。

二月二十二日～二十五日　母の墓を改葬した翌二十一日には妻は病床に就き、その翌日は湖人も病床に就いた。幸い病床にあったのは三日程であったが、生来頑丈なたちの湖人にとっては珍らしいことで、妻子ともに病にあった時は心細いことであったろう。

脊髄の中を這ひゆき脳髄をかむ蛇のあり生きむすべなし（廿二日）
やめる子の泣くが悲しも春の日の窓にくれかね我もやめるに（廿二日）
眼あくれば人ら居並びさゝやきをひたととゞめて我をまもるも（廿三日）
草花の苗などうゑて熱のあとわが楽しめば日の静かなる（廿五日）

手帳は三月に入るとメモと短歌が断続的になり、それ以後は簡単なメモのみがまれに書いてある程度である。そして、十二月下句になって再び短歌が書き連ねてある。

メモから三月以降の出来事を抜き出してみる。

六月二十七日　五十五連隊から召集を受け、七月三十一日除隊になる。

九月十八日午前三時、男子誕生。二十日辰彦と命名。

十一月八日　「野田次郎成績不良のため母なる人に切に乞はれてあづかる」とある。後に『次郎物語』の主人公名決定の時、長女晴代の主張によって彼の名が採られたという。

十二月十三日　弟清治から司法試験合格の知らせを受けた。（小学校教諭をしながら司法試験の準備中だった）

十二月三十一日　「田中も野田も家に帰る。何とはなしに気いそがわし。寝につきしは午前三時、いろいろの準備中、父はわからずや、母は全く計画なし。不快極りなし。予は先づこの家庭より脱却せざるべからず」で終っている。

次に、手帳に記された日常雑詠の歌の中から、湖人の心境を今少しくわしく見ていこう。

若く美しい妻と満一才の可愛いい長女に湖人の目が向けられたときには、満ち足りた心情が窺える。

生命のかたちを得たる吾子が身を黙して思ひ思へど厭かぬかも（1月8日）
藪柑子雪にこぼれぬ日の出でぬかくあらまほしき吾子が魂（1月8日）
しみじみと子のなつかしさ眼をひらき身じろぎもせで我を見る時（1月10日）
水底にありて星光るやはらかき心をもちて妻子とあらばや（1月10日）

しかし湖人の心には妻子との幸福のみでは満足しきれないものが時どき頭を持ち上げてくる。

雪そゝぎ冷たき風のふく宵は子をいだきても心淋しき（1月9日）
はやなかば世を渡りつと思ふとき子など生るゝあはれなるかな

（1月15日）

そして郷里の自然を眺める時湖人の人生は大きくふくらむ。

肥の国の野を見はるかす山に居て日の出づる見ぬ大いなるかな（1月6日）

青き色みそらに匂ひ光る風青野にそよぎ水遠く流る（1月10日）

潮鳴や我の心に青き雲白き雲など湧く心地にして（1月12日）

また時には少年の頃に思ひを馳せる事もある。

ひじりなど住みけん頃の心地して野に出でて見るひるの月かな（1月15日）

しかし、彼を取り巻く環境は余りにも重く、固い。自分のやりたい仕事への意欲は充分にあるのだが……

木のうつろ大地の底ににごりたる息ふきあげて春の重たき（1月10日）

そして、焦燥感に彼は絶えず苦しめられる。

水のもにちかひのことばよろづたびかきて沈みて死なばや星の夜（1月9日）

あるときは妻子をうとみひとり身の友と酒くみいらだちてあり（1月27日）

時には酒によって紛らす日もある。しかし、酔覚めの何とも言えない淋しさは、湖人の人生の淋しさでもある。歌境には自然主義文学の影響も見い出され、時代の姿とその中にある湖人を自から投影している。

ゑひしれて家にかへれば母と妻と妻の妹とさみしく語れり（1月2日）

淋しさは病に似たり正月の三日の昼の消えて行く頃（1月3日）

ふとさめし酔とねむりをまさぐりて眼をとづれば世は青白き（1月4日）

この淋しさは時には死をも考えさせたりする。

日の沈み白き木肌のならぶとき死ぬてふ事を思ひそめてき（1月27日）

さめてあれば我身世になく悲しけれ死ぬを思へばなほ悲しけれ（2月16日）

しかし、湖人はそういう感傷にのみおぼれていられる境遇ではなかった。彼の繊細で柔らかい神経のもう一方では、道義的、良識的な強勤な神経が彼を支配していた。

金の鶯かへあてばやと太宰府に父の行くをば淋しく送りぬ（1月7日）

この父を抱え、母や妻子を抱えて、

くさぐの古き仕来り一つだけにすてんとはせずさげすみつゝも（1月1日）

彼は自らにこのような生活を強いていったのである。

この手帳の短歌の歌語の特徴は、「さびし」「悲し」と言う心情表現の語が多いことである。この頃の湖人の心境が端的にあらわれたものであろう。

淋しさは黒く大きくかしましき鴉のごとし年くるゝ夜の（12月20日）

夕風の寒くしふくば日くるゝはことに春こそ悲しかりけれ（2月27日）

その他「黙す」の語も多い。自分の人生は沈黙しかないと悟った諦観の中にも、湖人のやり切れない欝憤を感じることが出来る。

戦の壁画のごとくなやましく小暗きなかに心黙せる（12月22日）

更に、対象物としては、樹木や木立ちがよく詠まれている。これも孤独な彼の心情を象徴したものであろう。

白けたる大木の枯枝紺青の空にうかべり浮彫のごと（2月4日）

気負わずに生活や心情をありのままに詠んだところに、現実を

反映した内容の豊かな文学への転換がおこなわれつつあった。後年の名作『次郎物語・第一部』などは、青年時代の観念論では到底摑み得ない確実な現実認識の把握が認められるが、この頃の態度にその源を見い出すことが出来る。彼の文学に対する意識の変革は、まず短歌に見い出せると言えよう。

(二) 教師時代の思索

年譜によって湖人の教職歴を一見してみよう。

明治44年	佐賀中教師		27歳
大正2年		結婚	29
3年		父死亡　内田家離散	30
4年		長女晴代出生　兄死亡	31
5年		長男辰彦出生	32
6年		弟弁護士開業	33
7年	唐津中教頭	長男死亡　次男覚出生	34
9年	鹿島中校長	次女満代出生	36
12年	唐津中校長		39
14年	台中第一中校長	三女照代出生	41
昭和3年	台北高教頭		44
4年	台北高校長		45
5年	(九月十日ストライキ)	三男徹出生	46
6年	台北高校長辞任		47

明治末期から大正初期にかけて、湖人の人生は激変した。大正五年頃から、表面上は一応の落ち着きを見せ、内面では煩悶と諦観の交錯した生活が続いた。ここでは主として、佐賀県下、及び台湾において校長の職にあった時代の湖人について、彼の生活や思索に焦点を当てたい。

1

三十代後半の湖人は、鹿島・唐津両中学校で期待される若き校長として敏腕を奮った。それより先、唐津中教頭時代の湖人のエピソードとして、当時の教え子の一人川越惣市は、『一教育家の面影——下村湖人追想』の中で、次のように述べている。

——唐津の町に仲道家という料理屋があった。下村教頭はその二階で職員の宴会を開いていた。下では町の学務委員が十四五名で打合せ会をかねて宴をはっていた。二階のさわぎがひどくなった。女中が二三度忠告に来たがいっこうに静まらない。とうとう学務委員の一人が「学務行事の打合せが出来ないから静かにせよ」とどなり込んで来た。下村教頭はそれを聞いて「さわげ、さわげ、大いにさわげ」と職員たちにハッパをかけたから大変だ。翌日の唐津日日新聞と時事新聞の夕刊に、ほとんど一頁をさいて「中学校教師料理屋で大さわぎ」というような見出しで、下村教頭を槍玉にあげて書き立てた。……下村先生はその攻撃を聞き流して一言の弁解もしなかった。そのうち、佐賀県下の教員大会が開かれた。下村先生の見識と弁舌はすでに有名で、大会の呼びものは先生の講演であった。聴衆を酔わせた大講演の最後に先生は「いやしくも神聖な教育問題を料理屋で議するとは何事であるか、料理屋は飲んでさわぐところである」と結んだ。満場の教員はやんやと喜んだ。日ごろのウップンを一瞬に晴らしたような気になった。——

多少大袈裟に喧伝された話とは思うが、それでも、学務委員への態度に湖人の反骨精神と見識の一端を窺うことが出来る。また、最後の部分は、佐賀県下で教師として湖人の占めた位置を如実に語っている。その他この書には、教え子や同僚の多数の追想記が載せてあり、湖人の教師としての声望を窺うことが出来る。

それによると、当時は中学校のストライキがたびたび起り、校長には頭の痛いことであった。湖人は高い見識から、ある時は生徒たちを説諭し、ある時は気合いをかけて生徒たちの気力を呑み、彼のペースに持ち込んで学校経営をスムースにしたらしい。そし

て、豊かな学識と思惟する哲人的素質と若さは、生徒たちに大きな影響を与えた。鹿島中から唐津中へ転任の時、留任運動の計画が立てられ、また、唐津中へ転学を願い出たものが数名いたが、湖人はその両方とも説得し、思い留まらせた。同じく、唐津中から台湾へ移転する時も大変な留任運動が起ったが、湖人は台湾教育の「理想と使命」を説き、町の人たちからも名残りを惜しまれながら唐津を去っていったと言うことである。

後年の『次郎物語』は、社会情勢の変化と湖人の教育理念の熟慮によって、必ずしもこの当時の事柄の反映ではないが、この追想記を読むと、細かい個個の事象はこの時代の直接・間接の経験が重要な素材になっていることがわかる。この時代、湖人が執筆し、講演したものが、文字になってほとんど残っていないのは大変残念なことである。

2

湖人の教師時代の思索を主にしてまとめた唯一のものに、『教育的反省』(昭9刊・泰文館)がある。代表的な諸篇に検討を加えてみたい。

大正十二年の「自己表現と奉仕」は、この時代の思想を代表する一篇である。『教育的反省』は昭和十五年再版の時、この篇の題名をとり、『自己表現と奉仕』と改題された。力を入れて書いた跡が感じられる。しばらく彼の論理を辿ってみよう。

「宇宙は個体表現の綜合であり、大人生は生命の表現によって、やがてまた、大人生自らを表現する。……個々のものゝ表現は、宇宙をして宇宙たらしめ、人生をして人生たらしめる必須の条件であり、神聖なる任務である。」

しかるに、この自己表現の過程において人間は迷妄をおこした。その所因としては、

「第一に、名と実の錯誤があり、第二に、所有欲と表現欲との混同があり、第三に普遍への奉仕と自己表現との対立観がある。」

と言い、以下、われわれはいかにしたらこれらの迷妄を克服出来るかを説く。第一点に関して、

「人間にとって、真実の自己表現は、仕事の外には何ものもない筈である。宇宙進展への敬虔な寄与、人生創造への勇敢な奉仕、そこに、吾々は、自己表現の醍醐味を味ふべきである。」

と述べ、第二点については、

「『生きて働く』の『働く』は所有を超越し、物を駆使しつゝ、刻々に自己を創造し、かつ表現する働きでなくてはならぬ。人間相互の正しき自己表現の交錯によって、不断に進展して行く人生相こそは、人類歓喜の唯一の源泉であり、聖にして永遠な宇宙霊への、輝やかしき通路である。」

と述べている。さらに第三点に関しては、

「自己完成は、やがて社会完成であり、社会完成は、やがて自己完成である。この事を明かに意識するところに、人生の肯定がある。そして、一切は未完成なるが故に、吾々は当然苦難をなめなければならない。苦難は完成への道である。」

「自己表現と奉仕との融合一致、これ即ち、永達にして亡びざる人間の真実道である。」

と言う。個人と宇宙、あるいは個人と社会について、その本質的な相違を論ずることなく直截に結びつけて論旨を展開したり、また、その点が明瞭になっていないために、個人の果す役割の中に精神的ニュアンスがともすると強調され勝ちであることが問題として残るだろう。

この論文に見られる湖人の思想の特質としては、人間の積極的、意欲的意志を強調し、人間や社会がそのような意志によって完成されていくと言う、全面的に人間性を信頼、肯定した考え方を指摘出来る。理想主義を基盤とするこの思想は、既に、高等学校時代の論説に見い出されるが、それらよりは整理され、論点が明確

になっている。そして、それを一層助長したものは、彼の教職歴であろう。大正十三年唐津中学校の校歌を作詞しているが、その作意を述べた文章からそれを窺うことが出来る。

「吾々は一人一人として『光』に蘇り、『力』に目覚め、そして、祖国の地盤に立つ『協力』の人たることによって、永遠に創造し躍進する『望の男の子』となって行くのであります。……ここに全人類、全社会の一体観を掲げて、献帰の魂をそゝりたいと思ったのであります。私の所謂一体観とは、個体と普遍とを切りはなして考えないことであります。我と、国家と、世界とを、対立的に見ないことであります。……」

ここには、「自己表現と奉仕」よりもより単純に純化された積極的な考えが出ている。若若しい前途洋洋たる生徒に毎日接触して、人生への積極的な意欲を掻き立てられたのも当然なことであろう。その他、彼が大正デモクラシーの中で教師生活を送ったことも関係しているであろう。

この校歌については、戦後になって唐津高校の校歌を新たに依頼された時、

「……唐中時代のあの歌は実は小生として今日でも内容的に見て不適当でないと思っている。」「(個人と国家と人類との一如的前進)は何等かの形で取入れる必要を痛感しています。」

と書いている。一体化の思想はこの後きめ細かく展開していくが、本質的には生涯変ることのない湖人の信念であった。

次に一体化の方法に触れてみよう。

われわれは一体化の完成のために「改善の信」を信じて、一歩一歩苦難の道を歩まねばならない。そして、

「運命に対する敬虔な服従、それは単なる投げやりな諦めではない。運命の静観は、使命の静観であり、苦難の意義の体得であり、そして、運命そのものを足下に踏まへて、其の上に、自由の天地を現出することである。」

と言う。この思索の根底にあるものは乃木大将の殉死である。湖人は基本的には自殺を否定しながらも、乃木の死は肯定して、

「自殺それ自身が、その人の使命の一部であり、自殺によらなければその使命の完成を期し難い、と信ぜられる場合である。」

と述べている。また、大正十四年に書いた「我の成長」の中でも、自己即一切、一切即自己の絶対境を把握して生の創造を試みようとすると、

「献身も、犠牲も、主観的には献身でも犠牲でもなく、それはたゞ『我』を生かすの道にすぎない。そこには悲壮なる殉教者の喜びがあるのみである。」

と書いている。

このような引用を並べると、森鷗外の『山椒大夫』など一連の歴史小説が思い出される。「安寿」はまさに死によって自己の使命を完遂したと言えるではないか。鷗外が乃木の殉死に触発されて書いた『興津弥五衛門の遺書』から出発した歴史小説は、積極的に自己を主張した『阿部一族』や『佐橋甚五郎』から、『安井夫人』『山椒大夫』『最後の一句』などのように、否定の形で自己をとらえた作品へと移行していることが指摘されている。この鷗外が辿り着いた心境は Resignation (諦観) であったが、これは、湖人の「第一次善」(昭3) と言う対話形式の人生論の中にもやはり見られる。

「『私は諦観といふことに、大きな知恵と、勇気とを、見出しうるやうに思ひますが。』『諦観はいゝ。だが、それは絶望と同じ意味ではないよ。それは深奥なる善を肯定し、ほがらかな世界に希望をつなぐ荘厳な心の態度なんだ。もがくといふ態度とは、比較にならぬほど立派な態度だが、やはり「もがき」が深化され、聖化されたものだろう。絶体絶命の場合、死力をつくして得られた大肯定の境地が、それだね。』」

さらにこの「第一次善」の中には、知恵によって運命を切り開

かねばならぬことを述べているが、鷗外も『マーテルリンクの脚本』と題した講演で、知恵によって運命を開拓したモンナ・ワンナについて強調して述べている。

今、私は乃木の殉死を起点にして、二人の作家が到達した共通点を求めてみた。思うに、鷗外も湖人も幼少の頃は儒教の影響を受け、青年期には、一方はドイツ文学、他方はイギリス文学と差異はあるが、ともに西欧の思想・文学に触れているなど経歴の共通点も見い出せる。しかし、これらは特に問題とすべきことではなく、明治時代、学問に志した者が大半通った過程であった。ただ、何に価値を見い出すかは個人によって随分違っていた。明治時代は本質的に近代性と封建性の二律背反的性格を持っていたが、どちらに比重をかけて考えるかは個人によってかなり相違があった。たまたま鷗外と湖人の場合は、価値観が類似していたと言えようか。

3

大正十二年十一月「国民精神作興に関する詔書」が出た時、佐賀県教育会より意見を求められて、「教育家の節操」を書いた。現場教師としての湖人を知る上で好都合の材料である。最後の部分を引用してみよう。

「維新後、教育家の活動の範囲は、日を追ふて狭められて来た。……

社会各般の出来事に就いて、生徒が具体的な質問を発する時、勇敢にこれに答へうる者が、今日の教育界に果して何人あるか。自ら進んで具体的に説明し、批判し、しかも、それを教育家の権利であり、義務である、と自覚してゐる者に至っては、寥々として暁天の星の如くではあるまいか。吾等はあまりに屈従しすぎてゐる。屈従は正義に盲目なる者のとる態度である。生徒に愚弄せられるのは、当然すぎるほど当然だ。制度が許さぬといふのか。それもあろう。しかし、制度は、たゞだまって見てゐたのでは、永久に改革されない。

ある地方では、教育家が思想問題を研究することを禁ぜられた。そして、その地方の教育家は、黙々としてこれに忍従した。驚くべき堕落だ。……教育が、国家生活と、個人生活の全部を取扱ふものである限り、吾々は、吾々の任務を完全に果すために、社会各般の問題に対して、もう少し情熱を有して然るべきだ。単に、与へらるゝものゝみを取るのでなく、職務のために必要なものを進んで取ることに努力すべきだ。国家重要の問題に関しては、教育者の団体として宣言を発表する位は、寧ろ吾々の義務だと考へて然るべきではあるまいか。どちら向いても叫ばざる者が教育家か、必要とあらば職を堵しても立つのが教育家か、少し考へたら解りさうなものである。……」

論文全体については検討を要する箇所もあるが、ここに引用した部分は、教師の倫理として永遠の真実であろう。ここには自己の教育理念に燃えた者のみの持つ怒りが感じられる。長い間教育の現場に携わった者の確固たる信念に基づく真理がある。前述のエピソードなどと合わせて読むと教育者湖人の姿が彷彿としてくる。思想は現実と対決して真に生きた思想となる。これは、今まで観念的な思索の多かった湖人が、現実社会の問題を具体的に捉えて書いた最初のものである。そして、現実の問題に対し、信念を持って、毅然として臨む態度は終生変わることがなかった。後年の社会教育家時代には、それが社会教育家としての彼独得の仕事を結実させたと言えよう。

4

湖人の思想の一つの特徴である理想主義は、全人類の幸福、社会全体の幸福を目的にしている。それと個人とがどのような関係にあるのか、簡単に湖人の思考の推移を辿ってみよう。

高等学校時代は、個人が「自性を尊び、生命を重んじ、活力を愛する」(生命と勝利)ための「修養」が大切で、そのためには「吾

人はベストをつくさんのみ」(凡夫)と結論づけた。佐賀県教師時代は、「自己完成は社会完成であり、社会完成はやがて自己完成である」(自己表現と奉仕)との見解から、自己の使命を完成するために運命に対して敬虔に服従する態度が必要であると考えている。この意見は渡台後も引き継がれている。即ち「我の成長」では、自我を生かす最良の方法が献身、犠牲であると言い、「第一次善」では、「諦観」を「死力をつくして得られた大肯定の境地」としている。各個人が献身や諦観の域に達した時、全体である宇宙や社会の求めるものと、各個人の求めるものが一致すると言うのである。(注1)

昭和五年の「教育的反省」では、この全体と個の問題について幾分変化が出て来た。その一つは、「卑小なものに対する敬虔の念」の強調、つまり、小さなものに対する価値の再発見である。「山羊の丸煮をして神に献げる信仰ほど、恐ろしいものはない。それは、敬虔な態度を以て、限りなく神を瀆すことになるからである。神への奉仕は卑小なるものに対する敬虔の念によって完成する。……」と主張している。

もう一つは、個の独自性を認識したことである。個人相互における「主観の完全なる一致は、不可能であると共に無用である。独自性は完全に守らるべきである。……自己の主観に他を同化し、完全にこれを服従せしめることは、神を瀆すことである。」と述べ、さらに「文芸上の宗匠気分が、いかに文芸を単調にし、堕落せしめたことか。」と文学にも言及している。(注2)

これまで、個人については、宇宙や国家や社会など全体の立場からのみ論じられて、個人の立場から問題にされることがなかった。全体の目指している目標が絶えず問題になり、全体を構成している個人については、全体の立場から扱われていたにすぎない。ここにおいて個人の意志や自由、そして独自性が問題にされてきたことは注目すべきことである。

後に湖人は『真理に生きる』(昭10)を著わし、そのはしがきに「全体に即して、独自に生きる」と述べているが、彼のこの人生哲学が、「教育的反省」を書いた時期を契機にして育ちつつあったと言えようか。だが、それは決して一直線に育ったのではない。同じ年の暮、「共同生活の精神的基礎」と題した講演の中では相変らず、「生命の発揮や、自己表現といふやうなことは、何としても社会との連繋を予想しなくては意味を成さない。」「己れの真生命を本当に発揮しようと願ふならば、やはり団体を生かすといふことに、先づ着眼しなければならない。」と述べている。彼の考えが、『真理に生きる』の序に書かれたものに定着するまでには、まだ時間がかかった。

(注1)以上のようにまとめてみると、阿部次郎の「人格主義」が想起される。両者は、自主的、永遠的な生の確立を希求し、倫理的な理念によって現実が支配されることを理想としているなど、その共通点を見い出すことはたやすい。また、湖人の場合は阿部における「リップス」のような関係はないが、それでも、高校時代における詩人ケルナーの強い影響を指摘出来る。湖人の論旨は、生命の自律を第一におきながらも、その発想法は東洋的自己滅却の方法によって社会や宇宙の大調和を祈願していると言えよう。同時代の思想家の影響を多少受けながら湖人もまた独自の哲学的人生論を展開した一人と言える。

(注2)この論文の要旨を「宇宙は、一面において、独自なるものゝ対立である。他面において、それら相互間の思慕である」とまとめている。したがって、独自性の問題もこの枠内において考えねばならないのは勿論である。なお「思慕するもの」と言う表現には、湖人の本質としての理想主義の立場が感じられる。

5

昭和五年九月十日から始まった台北高生のストライキは、湖人の人生に大きな影響を与えた。前年の十一月、自由主義者三沢糾の後任として、台北高の教頭から校長に昇格した湖人は、昇格と同時に大きな問題を背負わされていた。それは、三沢校長の自由

主義の教育が、必ずしも全職員に徹底していなかったこと。また、それが台湾総督府の見解とも一致せず、校舎落成記念祭（昭4）に上演した演劇（どん底）などを通して、しだいに摩擦が表面化してきたことである。湖人は渡台して四年五か月、台北高で教頭としての経験は一年に満たないものであった。無器用で社交性の乏しい湖人は、どちらかと言うと、長く交際することによって、その人間味が徐徐に感じられるタイプである。湖人は万事につけ事情のわからない中で、しかも誰一人として親味になって相談に乗ってくれる人のいない中で、八方構えの姿勢で校長の職務を遂行しなければならなかった。それが湖人の謹厳実直で融通性のない性格と相まって、学生に対する態度がやや固くなったであろうことは否めない。学生たちは三沢校長と比較して、湖人の賢苦しさに不満を持つようになったことも事実のようである。しかし、学校としては乱れた風紀を幾分かは粛正しなければならない限界に来ていたことも事実のようである。

事件は、直接には一学期末の試験にカンニングした生徒の処分不満と言う形で勃発した。そして、学生、父兄、教官、総督府役員など暗躍するうちに、ストライキは意外な方面に発展し、結果的には、退学三名、無期停学十数名の処分学生を復校させ、教授二名が退職すると言う形で落着した。この時犠牲になった教授の一人は、「要するに台北高のあのトラブルは、思想的に非常に進歩的であり、文学好きだった三沢さんのかもし出した雰囲気が、頑愚派によろこばれず、かつ彼らのケチな地位的不満や内外の野望がからんで、下村さんや私にそのシワ寄せが来たのです。しかし下村さんの認識が徹してさえおれば、事態は好転でき、彼らの蠢動を押え込むことができただろうに、と私は思います。なにしろ下村さんは校長になられて間もなく、私は帰朝したばかりの出来事で、あんなヘマな結果になりました。」（注1）と述べているが、それが事件の背後にあった真相であろう。「教育」の場に官僚機関が介在し、良心的教師に犠牲の皺寄せがきた官僚絶対主義のもたらした一つの悲劇であった。

（注1）明石晴代著「『次郎物語』にかけた父、下村湖人」（昭45刊）。なお、この事件に関しては同著にくわしい。

(三)　湖人と短歌（その二）

ここでは台湾時代と、上京後、社会教育に専念するまでの湖人の短歌について考えてみたい。台湾時代は豊かな自然の景物に湖人の歌心が甦った時期である。東京時代は焦操と新たな決意が交錯する中で、積極的に歌に取り組んだ時期である。

1

大正十四年の賀状に湖人は

あらそはぬ心となりて野を行くや木木ことごとく日にかがよへり

かにかくに小さきままに生きてあれば天つ光はゆたかなるかも

この二首を書き添えた。幾多の苦難を舐めてようやく五、六年前から安住の境地に到達していた。前年暮、二女満代の九死に一生を経験した湖人は、この年一段と落ち着いた心境で元旦を迎えたのだった。

この年の五月のことである。五高の先輩田沢義鋪から思いがけず、台中一中の校長として赴任することを勧められた。最初はかなり躊躇したようだったが、夫人の積極的な賛成などもあって決心を固め、六月半ば過ぎにはもう台湾の土を踏んだ。湖人の新しい人生の出発だった。

海を見ず一年へたり吾子らみな海こえて来し事を思はず

この歌は古い手帳に他一首とともに書きとめられていた。はるかなる故郷に思いを馳せた望郷の念が窺われる。しかし一方では、台湾人の教育に全てをかけていた湖人は、南国の明るい景物と素

朴な人情に次第に惹かれていくのだった。

台中一中時代は三年余りの短かい期間だったが、教育愛に燃えた湖人は、台湾人と本土人の軋轢がその根底にある従来からの難しい幾つかの問題を次ぎ次ぎに解決し、名校長としての名声が日に日に高くなっていった。彼の卒直な人柄とその真心が台湾人の信頼をかち得たのである。職場や家庭の安定した安らぎと明るい南国の風土は湖人に長らく忘れていた詩心を呼びおこした。校長としての出張も多く、その折りにも忘れず歌を詠んだ。台湾時代の歌は、湖人の歌集『冬青葉』の第二部にまとめてある。

初日いまだ光を見せずしんしんと大王椰子は星空に立つ
檳榔(ビンロウ)の花苞おちてうす黄なる垂穂ほのけしかろき朝もや
菩提樹のさ枝ゆりつつ真夏日の昼まばらかに雨過ぎにけり
真夏日の光をあびて安平(アンピン)の廃墟あかぐろし動かざる海
寂としていま落日すいちめんの猩々木は火を吐くがごとし

昭和四年の夏、湖人は念願の新高山登頂を決行した。

朝日さす新高嶺(ね)ろは眼交(まなかひ)にけ庄(ね)すがごとくせまり来れり

この直後台北高へ転任の交渉を受けたのである。

台中一中時代は一人で自由に歌を詠んで楽しんでいたが、台北に移ってからは、台北高内で結成されていた「台高短歌会」にすぐ参加した。これは超結社の家庭的な歌会であったから、湖人は最初から気安く打ち解けることが出来た。

当時、台北には、地道ながらも確実な歩みを続けていた短歌結社に、桶詰正治を中心とする「あらたま社」があった。昭和五年五月、三女照代が大病をした時、湖人は桶詰医師に大変世話になったが、それが契機となって、「あらたま社」に客員として参加することになった。桶詰家で開かれる歌会には妻子にまで参加を勧めるという熱の入れようだった。

病める児はベットに小さしそのねむる顔に見入りて妻はうごかず

むくむくと土けぶり立て牛車行き日ざかり風は動くともせず

山羊の乳ひえびえとして舌によきこの山峡(やまかひ)の日の高みかも

昭和六年九月末、湖人は台湾を去った

大いなる道を念じてこの島にわたり来し日を思ひつゝ淋し

日の中に砂塵あがれり別れゆく台北の街は秋ならむとす

ふるさとに近づくままに張りごころゆるびきたりて淋しき潮の音

実質的には台北高ストの責任をとっての退官であった。スト処理後も続いた総督府の陰険な策謀に湖人は我慢が出来なかったのだ。悲喜こもごもの万感迫るものが、湖人の胸中を去来したことだろう。

岩壁にちひさく立ちて眼をそらし吾子はゐしかも秋づける浪

この年中学校に入学した覚を残しての船旅だった。

2

湖人は昭和六年八月十日、高田保馬宛ての書状の中で、「今度はじめて『自己への忠実』と『子供への忠実』とが矛盾することを痛感しました。……私丈の心では、恩給で細々と暮して青年時代の詩心を呼びかへしてその道に精進したいと存じますが、それには子供達があまり幼いので思ひ切れません」と書いている。家庭の事情で文学への道を断念して、既に二十年の歳月が経過しているが、いまだに文学への復帰を考えてもみている湖人であった。就職の当てもないまま、ひとまず田沢義舗のもとで青年団の仕事でもと言うことで、一家は上京し、東京市淀橋区百人町に落ち着いた。この家は田沢家の隣りでもあった。田沢は当時自宅において『大成』という月刊雑誌を新政社名義で出版していた。湖人は『大成』に随想・社会時評・短歌などを毎号載せた。

上京後、しばらくの間、大日本連合青年団の嘱託となっていた

が、翌昭和七年一月、社会教育研究生の採用に伴い、その指導主任になった。彼の希望する文学の道へ邁進することは出来なくなったが、それでも翌八年四月、大日本連合青年団の講習所長に就任するまでは、まだ自分の時間を持ち得たので、『大成』への執筆は続けられている。

湖人のただ一冊の歌集『冬青葉』は昭和八年三月、「新政社」から発刊された。当時『大成』は政治教育を目標とした雑誌であり、「新政社」には経済的な余裕も全然なかったから、この歌集出版は全く田沢の湖人に対する慰藉激励の友情であった。湖人はこの歌集に期待するところがあったらしいが、歌壇ではほとんど反響を呼ばず、淋しそうな様子であったということである。『冬青葉』発刊後、高田保馬から中央専門誌への発表を勧められ、『短歌研究』へ作品を寄せている。「日向路」(昭八・五)、「木蓮」(昭八・六)「秋雨」(昭九・一)の各十首である。また、各作家の自選歌を編集した『新万葉集』(昭12～13刊・改造社)に、湖人の歌は次の四首が掲載されている。

まれまれに木蓮の花こぼれつつあかつきの雲照りそめにけり
枯草生ただに広きに一羽来て歩む鴉は大きかりけり
鵞のむれの夜声しづもり明き月河原はろけく照りしみにけり
つつしみを知らぬ男ら墓石をかけ声しつつまろばし行くも（母の墓改葬）

（初出の歌と比較すると若干表現の相違がみられる）

この時代の湖人の歌の主たる発表機関誌は『大成』であった。これらの歌は後に、昭和七年十二月号までの発表分を『冬青葉』に、それ以後の分を『真理に生きる』の後にまとめて再録した。なお、『短歌研究』発表の大部分も『真理に生きる』の中に再録されている。

3

歌集『冬青葉』は総歌数五百二十六首、高田保馬の序と自序、田沢義舗の跋文から成る。第一集（二九八首）と第二集（二二八首）とに大別され、第二集は台湾での作品を収める。しかし、台湾での作品でありながら、台湾の特色の出ていない歌三十五首は第一集に入れてある。第一集は主として、昭和六、七年頃の東京時代の作品が多いが、大正時代の作品で手元にあったもの七篇、五十八首を収めている。更に学生時代の作品五首もある。この五首は「どうなり私の記憶に残って居るものばかり」を集めたもので、原作と比較すると幾分変っている。ほとばりし出る情熱は消え、沈潜した味わいがでている。

火と燃ゆる紅蓮の池に千日を泳ぎつかれて死ぬべき恋か（帝国文学）
燃えて咲く紅蓮の池に千日を泳ぎつかれて死なんとぞ思ふ（冬青葉）

大正時代のもので注意しておきたいのは、「母の骨」二十五首である。これらは前述のように、大正五年の手帳にあった八首が原型となっており、『冬青葉』に収録の時、増補訂正されたものであろう。

されかうべき吾見るべしや乳たらひし母のされかうべ吾見るべしや
草の根はげに深からむこの下に二十年母はしづもりいましき

田沢義舗は跋文に「全く生命の奥底にひそんでゐる霊魂の、込みあげてくる叫びである。魂の鳴咽であり、呻吟である。詩境と云ひ得べくんば最深最奥のそれである」と最大級の讃辞を与えている。この讃辞は多少大袈裟な感もないではないが、父、兄と当時相次いで肉親を亡くした湖人が、少年の日に亡くなった母へ思いを馳せている心境の偲ばれる作品である。

湖人の歌は肉親を初め、友人、知人などを題材として詠んだものには情感溢れるものがあり、彼の暖かい人間味を遺憾なく発揮している。台湾で三女照代大病の時詠んだ「病児」二十八首など

もその代表として挙げることが出来よう。

こやる児のおとろへしるく目に立つをかたみに云はず妻といむかふ

東京時代の作品は大半が『大成』に発表されたものである。『冬青葉』にある二百二首のうち、百二十四首が『大成』に掲載されている。『冬青葉』の構成にはかなり気を配ったようだ。たとえば、『大成』では、「はだら雪」(昭七・四)「つぶら芽」(昭七・五)として発表された歌が、『冬青葉』では「春の霜」とまとめられており、反対に『大成』で一括して発表されたものが、『冬青葉』ではそれぞれ適当と思われる題名のところへまとめられたりしている。その他、「概ね昭和七年の作」と記された「青葉のころ」の中に含まれている「子らが捨てし……」の歌は、実は昭和五年の作歌であるなど、何年かにわたる作品を整理した後も窺える。

『冬青葉』以降の作品は前述したように『真理に生きる』の後にまとめてある。『真理に生きる』の自序に「本書には、右のほかに短歌百六十余首を収録した。すべて、先年出版した歌集『冬青葉』以後のもので『短歌研究』その他で一度発表したものばかりである」と書いている。「その他」は勿論『大成』を指すが、この二誌以外のものに掲載された歌、約三十首は初出不明である。

次に『大成』に発表された歌について一言付け加えておく。『大成』発表の歌の大部分は近作だが、時どき旧作も引っ張り出されている。たとえば、昭和四年新高山登頂の折の歌などがそうである。また、『大成』発表の歌の大部分は『冬青葉』『真理に生きる』に収録されているが、肉親、知人などの結婚や追悼、その他の歌は省かれている。その中から、

郷里に講演旅行中たまたま義伯父の死に遇ふ（七首の中から）

有明の干湾千町を埋めたてむその雄ごころは酒にふさへり

子なく妻なく冬木のごとくうそぶきて酒を呼ばひて過し一生

なお、昭和九年六月号の「初夏」と題した十三首が『大成』における最後の作品だが、これも『真理に生きる』には収録されていない。その中から盟友田沢義舗を詠んだ歌一首、

一生の最後の仕事見きはめて心ほがらにひた押しに押すか（ある友）

4

昭和六年から九年にかけての歌三百九十余首（注1）を大別すると、日常生活の中から折に触れて詠んだ歌が約その半数を占め、旅中の歌が約三割、残りの約二割が肉親及び交友関係の歌である。日常雑詠の中を季節によって分類すると、秋から冬にかけて詠んだ歌が、春から夏を詠んだ歌の約三倍強になる。秋や冬の季節から感じられる寂しさ、厳しさ、孤独、沈思などは湖人の心境を反映させるのに適切であったからであろう。

日常雑詠の中から夏を詠んだ「青葉のころ」と冬を詠んだ「寒雀」の素材を中心とした語分析をやってみよう。（　）の数字は頻度数

(1)「青葉のころ」三十四首（昭和七年）

a 名詞　＊植物――くぬぎ（3）青桐　大木　樹々　枝　若葉　青葉　柿の花　青松笠（各2）実桜　緋牡丹花　芝草　草（各1）その他――森　草生（各2）野　青野　杉山（各1）

「青葉のころ」の題名にふさわしく、青青とした樹木が多く素材になっている。そして「青葉の樹木」からは、生命感、理想、たくましい青年の姿などが感じられ、湖人が特に好んだ素材の一つと思われる。

わか葉するくぬぎの森ゆ大いなる栗毛の馬はあゆみいでにけり

＊「夕べ」（4）「雨」（7）――特に使用度の高い語彙である。その語感の持つ幽けさは「蚊の声」（2）にも通じ、更に、「ひとつ」「一羽」「一人」（各1）などの孤独感にも通じる。静寂な雰囲気を愛した湖人の一面が出ている。

青桐の萠黄の花のほろほろと蟇の背に散るゆふべかなしも

＊馬（2）　鳥　鳶　雀　蟬　蜻蛉　地虫　蟇　蚯蚓　蟹　蚊の

声　蚊の鳴く声　蛾の羽根（各1）――動物の素材とその取り上げる方に、小さくひそかなる生き物への愛情の目が注がれている。

全身にただいちゃうの感覚をもちて住めるかあはれ蚯蚓は

b形容詞・形容動詞（転成名詞を含む）　＊しづけし　寂し　うつくし　暗し（各3）　遠し　大いなり（各2）――ほとんどの語が、湖人の当時の心境を象徴していると言えよう。

子らが捨てし蜻蛉のむくろその青き眼のしづけさよ薊むしろの上に

＊白し（4）青し（3）赤し（2）――湖人の歌は「白」と「青」が圧倒的に多い。自然主義文学の影響もあろうが、湖人の孤高の精神を象徴しているとも言える。全体的に見て色彩語のかたよりと貧弱さが指摘できる。

＊沼にうつる樹々のうつしさ白き鳥たまたま飛ぶに沼のうつしさ

(2)　「寒雀」二十二首　（昭和六、七年）

a名詞　＊空（大空、夕空、冬空を加えて）（6）――「空」にはるかなるものへのあこがれがあり、理想主義者湖人の一面を感じさせる語である。

うちまもる冬木の梢にいささかの風のさやりて空のふかしも

＊冬木（冬木立　冬枯のくぬぎ　木立を含めて）（8）やつで（2）竹　松（各1）――季節の関係もあるが、色彩のない「冬木」が素材として大きな位置を占めている。「寒雀」「小鳥」「鶏」の他は動物は素材になっておらず、全体として歌に動きが少ない。ようやく老境に入り、しみじみと落ち着いた生活を願っている心境のあらわれであろう。

冬枯の木立のうへに街あかりほのぼのと見え宵のさびしも

＊宵（2）夕さり　夕空　夕霧　ゆう光（各1）――素材に夕暮が多く使用されている。暮れゆく人生の象徴であろう。やはり、彼の心情をあらわしている語である。

凝りのこるはだらの雪にゆふ光のしましくは射す野に立ちにけり

b動詞　＊動かざる（3）――動くべきものも動かずにいる。そのような安定した状態を望む心境を反映した語である。

大いなる濃きかたまりの雪ひとつ港の冬の空にうごかず（神戸にて）

＊凝りすめる。凝りのこる（各1）――「凝る」という語感から、湖人の集中性や求心性が感じられる。学生時代の論文に見られた唯心的傾向に繋がる語である。

＊澄む（凝りすめる水　すめる冬空）（2）――湖人の純粋潔癖な性格と透徹した心境が窺える語。

寒雀ならびとまりて動かざる冬木がしたの凝りすめる水

以上、動詞では、使用語彙が二回以上のものについて、その語の持っている性質を中心に考えてみた。

素材を中心とした歌語の分析によって、湖人の心境、性格に触れてみた。歌のリズムには触れられなかったが、全体的には淡淡とした表現形式の中に枯淡、閑寂な味わいをにじみ出していると言えよう。総合的にこの期の歌の典型として『冬青葉』の序歌二首を挙げることが出来る。

冬空の暮の光にしづみ居て椎のむら葉はさやがざりけり

冬青葉に来てとまりて空を見る鴉ひそけし暮のひかりに

歌集の題名『冬青葉』は庭の椎の木のこと。「鴉」は「さ沼べの日なかに立ちて空を見る大き鴉の生きのひそけさ」の鴉と同様湖人の分身である。「青葉」「鴉」と言う素材、「さやがざりけり」「光にしづみ居て」と言う表現の中に彼の特色が見い出せる。

5

最後に湖人の短歌の宗教的傾向について一言触れておきたい。さきの歌語の分析のところでみられた求心的集中的傾向は、自然の中に神を見い出す宇宙生命力の思想に通じていると言えよう。高

田保馬は湖人の作歌の頂点を「雪の夜」(昭八)に見い出している。

雪原の夜はしづみて万劫の生死の浪をとどめたるらし
あきらかにわれの生けるをわれ感ずただにしづけき雪の夜のふけ

このように生命を扱った唯心的・神秘的傾向は学生時代の短歌の大きな特徴であった。高田保馬は五高時代からの親友で、湖人の詩歌の良き理解者であってみれば、まことに至言である。湖人の心の深奥にある思想が、豊富な人生経験によって濾過されて出来た歌とみることが出来る。

「私は、若き日に神を思い、おもいつづけて来ていながら、ついに一つの宗教の信者になることが出来なかった。近代のひきつづきである現代は、『恒なるもの』を喪失したいというよりも、むしろそれを必要としなかったように見える。けれども『恒なるもの』なき平和があるだろうか。また、平和のない人間の幸福があるだろうか。」

これは、安田青風の歌集『遍歴者』(昭39)のあとがきであるが、まさに湖人のことばを代弁しているかのようである。湖人の場合、神は宇宙の大生命であった。彼は人間の倫理や宗教を絶えず問題にはしたが、宇宙生命論を基底においた発想であったから特定の宗教には固定しなかった。「あゝ人生生存の実在は、情意より発展したる生命なる哉。永遠の権威を有するものは、情意より射出したる気力なる哉」(生命と勝利)と生命や気力が「恒なるもの」であり、ひたすらそれの具象化に邁進し続けたと言えよう。

近代の歌壇の傾向として、宗教的情操や宗教的思索を扱った作品は極く少ない。歌壇から孤立していた湖人であったからこそ、専門歌人が持ち得なかった独自の歌境——若き日から思索続けた——を素直にのばし得たと言えよう。

昭和四十六年九月十六日受理

The Shaping Process of Kojin Shimomura's Thought (2)

Haruko FUKAGAWA

Following the essay already published,the present writer has considered his thought and life in his teaching days in this essay.The main points are :

(1) Adding the consideration of his relationship with his tankas in his student days, she has analyzed his life and sentiment with reference to his tankas written in 1 9 1 5 . For it was in 1 9 1 5 that he lived a steady life in his teachership. Then he came to write tankas in the plain and realistic way in stead of the idealistic one. His tankas express the psychological struggle in life.

(2) Studying the change of his thought from his essays in his teacher days, she has understood that his affection towards little things and his emphasis upon the peculiarity of individuals are the signs of the change of his sentiment. The educational affection upon his eagerness and belief as a teacher presents us a serious question.

(3) Referring to his life and his tankas' characteristics in his stay in Formosa, she has taken up his tankas in his Tokyo days as the main object of her study. The present study analyzes his poetic words and deals with the characteristics of his sentiment and character.